
夢現 (ゆめうつつ)

T・M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現ゆめうつろ

【Nコード】

N1992T

【作者名】

T・M

【あらすじ】

この作品は、以前短編作品として投稿した同名作の連載版となります。トライガン・マキシマムでの戦いを終えたミリオンズ・ナイズが、不思議なものに誘われて、水の惑星AQUAへ行き、様々な人やものと出会い触れ合う、そんなクロスオーバー作品です。戦闘描写一切無し、両作のネタバレ多数です。でそういうものを読むのに抵抗がある方はお気をつけ下さい。

1 砂の惑星から、水の惑星へ（前書き）

遙か、時の彼方。

まだ見ぬ、遠き場所で。

唄い続けられる、同じ人類のうた。

1 砂の惑星から、水の惑星へ

「……これで、少しは食料の足しになるだろう」

自身に残された、搾り滓のような僅かな力を振り絞って、彼は、不毛の大地に1本の木を出現させた。

大地に根を張り、瑞々しい赤い果実を実らせているその木に、傍らの少年は目を点にして驚いた。

「うわ、リンゴだ！ こんなふうに見えるの!？」

初めて見るリンゴの木に、少年は心底から驚いている様子だ。そんな少年の様子を無視して、彼は言葉を紡ぐ。

「……………あいつを……………頼む」

自分でも、驚いている。

こんな子供に。あんなにも憎悪していた人間に。

かけがえの無い、この世でたった1人の兄弟を託すなど。

「え？ あの……………何処か、行くの?」

少年は彼の言葉からその意図を察し、率直に訊ねてきた。

彼は何も答えず、自らが生み出した赤い果実をじつと見つめていた。

何故、俺は食料の足しにと、この樹木を、この果実を“持って来た”？

……………考えるまでも無い。答えは、単純で明快だ。

この果実が、赤いから。

まるで、あいつのように。

「えっと……………あの……………それ、ヴァッシュにはちゃんと聞いた?」

少年の重ねての問いにも、彼は何も答えない。

すると、少年はどうやらそれを無言の肯定と判じ、慌てて家へと駆け出した。

「駄目だよ、そんなん！ ヴァッシュ！ ヴァーッシュ!!」

察しのいい少年だと、彼はそう思った。

それでも、ヴァツシュに別れを告げようとは思わない。

何も言うべき言葉は無い。語るべきことも無い。……もう、合わせる顔も無い。

もう、充分過ぎるのだ。

150年もの間争ってきた俺を、あいつは、最後の最後まで殺そうとせず……あまつさえ庇い、命を救ってくれた。

もう二度と、共に行くことはできぬと諦めていたのに、一緒に羽ばたく事さえできた。

それだけで、俺は……。

そして、彼　　ミリオンズ・ナイブズは目を瞑った。

次の瞬間、ナイブズは纏っていたボロボロの外套を残して、ノーマンズランドから、ヴァツシュ・ザ・スタンピードの前から消えた。

それは、唐突な覚醒だった。

どうやら、気付かない内に眠っていたらしい。だが、眠りに落ちた覚えも、眠りに落ちる直前の記憶も無い。

そして、周囲を見回し　　驚いた。

ナイブズは、何かの部屋の中にいた。

何の部屋だろうかと考えながら、周囲を観察する。

座っている椅子は2人が座れるもので、隣は空いている。対面にも同じ椅子があり、都合4人が向かい合って座れるようになってい。それは他の場所も同じで、合わせて12個ほど、そのようなスペースがある。

窓もあるので外の様子を覗いてみるが、真つ暗で何も見えないし、何かがあるようにも見えない。

分かる事は、ガタン、ゴトン、という音と共に伝わってくる振動から、この部屋が動いている。つまり、砂蒸気のような乗り物の中の一室であることぐらいだ。

そう考えてみれば、成る程、この部屋には砂蒸気の高級客室に通じるものがある。前後に1つずつ見える扉は、外ではなく乗り物の内部に通じるものだろう。

さて、どうするか。

何故、自分がこのような場所に座って眠っていたのかは、この際どうでもいいでしょう。

このまま座っているか、状況確認のためにここから出るか。

ナイブズがそのような思案に耽って暫く経つと、ピクリ、と彼の眉が動いた。

後ろ側の扉が開いた。つまり、何者かが現れた、ということだ。

足音は真つ直ぐこちらに向かってくる。ならば、振り向くまでもなく近くに来るのを待てばいい。

扉から椅子まで然程の距離がなかったこともあり、新たに入ってきた者はすぐにナイブズの視界へと入ってきた。

それは、濃紺の制服に身を包み、帽子を目深に被った大柄な人間のような、ナニカだった。

ヴァッシュと方向性は違えども、150年もの間、人間を、同胞たるプラントを見つけてきたナイブズには、制服を着ているものが人間ではないことを一目で看破することは造作もないことだった。

だが、だからと言ってどうすることもない。

今のナイブズには、何かをする理由も想いも無いのだから。

人間でもプラントでもない、恐らく砂蟲とも無関係の存在だろうが、どうでもいい。好奇心も恐怖も、微塵も湧かない。

こちらに干渉するつもりが無いのなら、捨て置くだけだ。

ナイブズがそのように思い決めると、それを見計らったかのように、制服を着たものは帽子を僅かに浮かせて会釈すると、右手を差し出してきた。

切符を拝見します

何故か、その動作の意味がすぐに理解できた。まるで、意味が自分の脳に直接伝わってきたかのように。

しかし、ナイブズにはこの乗り物に乗り込んだ記憶が無い。当然、切符を買った覚えも無い。

無視して無賃乗車でも決め込もうかと考えていると、不意に、頭上で何かが動く気配がした。

「にゃ」

妙に顔が横に長い、黒猫だ。

どうやら頭上の網棚の上に最初から乗っていて、今まで眠っていたからナイブズも気付かなかったようだ。

黒猫は網棚から飛び降り、ナイブズの座っている椅子の通路側に着地した。その口には、何処からか取り出した切符が咥えられていた。

制服を着たものはそれを受け取ると、左手に握っていた道具を宛がい、パチン、という音を響かせた。どうやら、切符を切った音のようだ。

黒猫は切符を受け取ってすぐにどこかへと仕舞うと、ナイブズをじっ、と見つめてきた。制服を着ているものも、同様にナイブズを見ている。

どうやら無賃乗車は罷り通らないようだ。それに、猫でさえも切符を見せたというのに、俺は見せないというのは収まりが悪い。ど

うしたもののか……？

ふと、握っていた右手の中に妙な感触があることに気付いた。右手を顔の前まで持ってきて、開く。

そこには、切符があった。

行き先の書かれていない、白紙の切符が。

「……あ」

自然と、声が漏れる。

プラント融合体を通じて直接心に響いて来た、ヴァッシュの言葉。ヴァッシュと共にレムから聞かされた昔話。

それらが、瞬時に脳裏に甦る。

半ば呆然とし、戸惑いながら、制服を着ているもの 車掌に、白紙の切符を見せる。

車掌は、当然のように切符を受け取り、黒猫の時と同じように切符を切って、ナイブズに白紙の切符を返した。

佳い旅を

車掌は会釈をして、そのまま去っていく。

黒猫は、ナイブズから視線を外して猫らしく座っている。

ナイブズは、白紙の切符を見つめながら、思い出す。

星と人類とプラントの未来を懸けた最後の戦い。その佳境で、ヴァッシュが融合体へと飛び込んできたあの瞬間のことを。

まだ、間に合うはずだ。きっと、やり直せる。だから、諦めないで。だって……未来への切符は、白紙なんだから

何千何万というプラントの集合意識の中、その一つ一つに伝わっていた、ヴァッシュの言葉。

それに応えて、彼女達は真っ白な羽根を散らばせて、ナイブズの画策した人類のいない未来を否定して、人と共に歩む何も描かれていない未来を選んだ。

ならば、この状況は……この白紙の切符は、ヴァッシュと、彼女達からの餞別なのだろうか。

新たな未来を行け、何も描かれていない地図の突端を歩いて行け、と。

ならば、是非も無い。

「ぶいにゆ」

珍妙な鳴き声に目を遣ると、そこには小さな旅行鞆を持ち服を着た、見たことの無い珍妙な白い生物がいた。

どうやら相乗りを希望しているらしく、隣の黒猫と共にナイブズの返事を待っている。

「……好きにしろ」

言うと、白い生物は、ぺこり、と頭を下げて黒猫の対面の座席に座った。

乗り合わせた乗客が人間でもプラントでもないのは、ヴァッシュ達のはからい……のはずが無いが。単なる偶然だろう。

……気が向いたら、どこかの駅で降りるか。

そう決めると、ヴァッシュと共に聴いたレムの昔話を思い出しながら、ナイブズはまどろみの中へと、150年ぶりに穏やかな気持ちで沈んでいった。

次はI、AQUA。水の惑星、AQUAで御座います

水の惑星という言葉に惹かれて、ナイブズはそこで降りることにした。同じ座席に乗り合わせた黒猫と白い生物も、同じ所で降りるようだ。

そして、ナイブズ達と入れ違いに乗り込む乗客は全てが猫。奇妙なものに乗ってしまったものだ、しみじみと、しかしどこか他人事のようにそう思った。

車両から降りる際、ナイブズは先程の車掌に、惜しみながらも白紙の切符を渡す。

車掌は切符を受け取ると、判を押してそのまま返して来た。

「なに……？」

返された切符を受け取りながら、ナイブズはつい声を漏らして、車掌を見る。

車掌は黙って頷いて、外へ降りるように丁寧な物腰で促した。

折角の白紙の切符、失わずに済んだのは幸いだが、何故、この車掌は受け取るうとしない？ 切符という物は、降りる時に回収する物のはずだ。

そんな疑問を抱きながらも、ナイブズは車両の乗降口を潜った。

またの御乗車を、お待ちしております

そういうことか。

またも頭に響いた、車掌の会釈の意味に納得する。

白紙の切符は、どこへでも、どこにでも行ける。何時でも、何時

までも使える。

そうでなければ、白紙の意味が無い、か。

納得し、白紙の切符を懐に仕舞う。そして悠然とした足取りで、ナイブズは未知の大地への第一歩を踏みしめた。

まず、空気が違った。

ノーマンズランドの乾いた埃っぽい空気でも、血と硝煙と人の臭いが混ざった空気でもない。

瑞々しく、穏やかで、ただ呼吸をするだけで安心できてしまうような、不思議な空気。

見回せば、車両の周囲の建築物もノーマンズランドでは見たことの無い作りのものばかりで、年季を感じさせながらも弾痕も罅割れも見られない、綺麗な家屋ばかりだ。

そして、風の音も違う。

ただ吹き抜け、鼓膜を振動させるだけではない。砂埃が舞い上がる音とは全く違う、ざあ、ざあ、と、何かが波打つような奇妙な自然音まで聞こえるのだ。

「ぶいにゆー！」

白い生物の大きめの声を聞いて、振り返る。どうやら、車両が発するらしい。

見ると、それは 汽車だった。

地球でもとうの昔に廃れてしまったという、石炭の燃焼と水の蒸気を利用して走る、極めて原始的な機械。

それを見て、ナイブズはレムの昔話との一致に驚くと同時に、何かが引掛かった。

なんだ。俺は、いつか そう、テスラの事を知るよりも前に、純粋に、人間の事を知ろうとしていた時に、これを……いや、この状況とほぼ同じことが書かれていたものを、読んだ覚えがある。

そんなことを考えている内に、汽車が発する。

汽車は短い距離を走ると、やがてレールの上から、遠い夜空へと走って行った。

「……そうだ、あれだ」

思い出した。あれは、日本人のある作家が書いた物語に出て来る
汽車、そのままだ。まさか、あんな不可思議なものが実在するとは。
夜空の向こう、遠い銀河へと走っていく汽車を、ナイブズはその
姿が見えなくなるまで見届けた。

「夢ではなく、物語の中にも迷い込んだか？」

つい、そんなことを呟く。

……もしも、本当にあの汽車が『あの物語の汽車』だとしたら、
ここは物語の中ではないのだろうか。

そういえばと、ナイブズは空を見上げる。

汽車を見送っている時に気付いたが、ここは夜だ。ノーマンズラ
ンドにいた時は太陽が2つとも上っていたが、ここでは月と星が夜
空で輝いている。

星空を見上げ、風の音を聞きながら、ナイブズはこれからどうす
るか考えた。足元で黒猫と白い生物が「にゃあにゃあ」「にゅっ、
にゅっ」と鳴いているが、歯牙にもかけない。

考えて、取り敢えず今は、最も気になるもの　風の音が聞こえ
てくる方に歩いて行くことにした。

それを、黒猫と白い生物はどこか寂しそうに見送った。

#2・今までとこれから

暫く歩き続けて、何時の間にか周囲の街並みが変わっていることに気付いた。

建屋には罅割れや経年劣化などが目に付くようになり、先程見た、汽車から降りた周りの家屋が不自然なほどに真新しく思えてくる。

しかし、どの家屋もノーマンズランドの物とはやはり違う。

どちらかというところ、荒野や砂漠に沈みながらも機能を保っている移民船【シップ】に近い印象を受ける。

外観や作りではなく、その纏う空気や存在感、とも言うべきだろうか。

永く、変わらずに在り続けている。そのように思えるのだ。

ノーマンズランドでは、そういう建屋は不時着した移民船を除けば少ない。稀に築半世紀を超える希少な物もあるが、ナイブズ自身が引き起こした『箱舟事件』によって更に少なくなり、その数は片手の指で数えられる程度ではないだろうか。

だからこそ、周囲の建物 或いは、この街全体が持つ独特の雰囲気、ナイブズは興味を持っていた。

試しに手近な壁に触れてみたが、やはり手触りが違う。ノーマンズランドの建物に比べて、弾力があるというか、瑞々しいというか、そのように思える。

汽車の中で聞いた『水の惑星』という呼び名に違わず、この星は水が豊富で、大気中の水分も濃いのだろう。だから、壁も空気も乾いていないと考えれば自然だ。

そんなことを考えながら、道なりに歩き続け 注意を他に向けていた為に、踏み出した右足の先に地面が無いことに気付かなかつた。

しかし、衰えたとはいえないナイブズは人類を超越した存在。それで無様に転倒することは無く、バランスを崩すよりも先に右足を引っ

込めた。

急に道が途絶えたことを怪訝に思い、ナイブズは足元を見遣った。そこには、水があった。しかも、ただあるのではない。大量の水が、絶えず流れ続けているのだ。

「なに……!？」

驚き、思わず声を漏らす。

こんなにも大量の水が流れているのを見るのは、ナイブズも初めてだった。

元から水が一滴たりとも地表に存在していないノーマンズランドは当然として、幼少期を過ごした移民船の中でも、こんな状態の水を見たことは無かった。

だが、その頃に学んだ知識を、ナイブズは思い出した。

「確か、これは川……いや、水路、か？」

この状況と合致する単語を思い出し、半信半疑で呟く。

恐る恐る、身をかがめ、水に触れる。

肌の感触から、目の錯覚や幻覚の類ではないと悟る。流石に、触覚や聴覚まで含めた幻覚ということはあるまい。

周囲を窺うが、警報装置や守衛の姿は見当たらない。まさか、これだけの量の水を無造作に放置しているのだろうか。

辺りにナイブズが思ったような物は影も形も見られない。代わりに、気付いた。

この水の流れて行く先から、この星に来てからずっと聞こえていた、風の音が聞こえてくる。

水路の終着点と、風の音が聞こえてくる先。

その両方に気を惹かれ、ナイブズは再び歩き出した。

その姿を、数匹の猫が見守っている。

途中から空気に妙な香りが強くなつて来たのを不思議に思いながら、水路に沿って歩き続け、数分後には、ナイブズは水路の終着点に辿り着き、そこで足を止めた。

目の前に広がる光景に、息を呑む。

あまりにも衝撃的な光景に、ナイブズの思考は停止してしまった。まるで、ナイブズの周りの時間だけ止まってしまったかのような錯覚を感じるが、実際にそうでないことは、今も聞こえている風の……否、波の音が証明している。

やがて、空が白み、太陽の光が差し込んで来て、その刺激でナイブズは漸く我に返った。

そして、再び目に映った光景に、言葉を失った。

太陽の光を浴びて、キラキラと光る水面。その輝きは、如何なる宝石も霞んで見えてしまう程、鮮烈で、眩い。まるで、水の底にも一つの太陽が沈んでいるようだ。

水面の光り方は、常に波打っている為に一定ではなく、1秒毎に変わり続けている。きつと、この先ずっと、同じ光り方はいえな。その瞬間だけの輝きを、今もこうして放っている。

そんな光景が、見える限り。地平線ではなく、水平線の彼方まで、ずっと、ずっと、続いていた。

今、ナイブズの目の前には、彼がこれまでの人生で想像したこと無かったほどの莫大な量の水が存在していた。それこそ、ナイブズの超人じみた視力でも対岸の大地が見えず、水平線しか見えない程だ。

厳密に言えば、ナイブズはこの地形の事を全く知らなかったわけではない。まだ幼い頃、ヴァッシュと共に地球や人類の事を学んでいく過程で、ナイブズはそれを幾つかの映像資料で見て、知っていた。

それでも。実際に目の当たりにするそれは、想像を絶するほどの存在感と、圧倒的なリアリティを持って存在していた。

これが……海、なのか？

理屈で目の前の物を理解すると、次いでナイブズは五感全てで目の前の風景を感じ取った。

この匂い……これが、潮の香りか。

独特のじめつとした感触……これが、海の間風か。

空気に混ざる、不可思議な塩辛さ……これが、海の間風か。

この星に来てから、ずっと聞こえていた風の音……これが、波の音か。

これが、海か。

こんなものが、本当にあったのか。

移民船の中で生まれ、砂の星で生き続け、150年。

それなりに以上に長い人生を歩んで来て、こんなにも驚くことがまだあったとは。

感慨に耽りながらも海を眺めていて、ふと、海の上を何かが動いていることに気付き、それを見る。

人間の老人が、木製の細長い物 原始的な船に乗っていた。

この星に来て初めて目撃した人間の姿に、ナイブズは、ここは猫の国ではなかったかと妙なことを考えた。あまりにもナイブズにとつての現実や常識から乖離したこの星は、今まで見たのが猫ばかりだったこともあり、それくらい突飛な場所ではないかと思ったのだ。老人は『T』のマークが入った帽子を被り、鞆も持っている。恐らく、何らかの仕事のシンボルマークなのだろう。

ナイブズからの視線に気付かず、そのまま老人は船を漕いで別の水路へと入って行った。

それで気付いたが、この街には至る所に水路があるようだ。これだけの数の水路があり、途方も無いほどの量の水があるのなら、その管理が杜撰なのも当然か。

誰かが独占しようとしても出来ないほど、この星には水がありふれている。ノーマンズランドには、砂塵の荒野がありふれていたように。

ナイブズの人生からすればあまりにも奇跡的な光景も、この星では当たり前前の事なのかもしれないと思うと、なんだか間抜けに思えてくる。

だが、間抜けでもいい。
今は、もう暫く、海を眺め、波の音を聞いていよう。

「おい、貴様。五月蠅いぞ、黙っている」

海を眺め、波の音を聞き続けて、どれだけの時間が経っただろうか。

途中、船に乗って唄を歌っている女性が近くを通り、その歌声が波の音を遮ってしまうので耳障りに思ったナイブズがその女性を咎めた、ということがあったぐらいで、それ以外は何事も無かった。そう、何事も無かったのだ。

この星、この街にも確実に人間がいる。だのに、唯の一度も銃声も聞こえず、誰も悲鳴を上げなかった。恐らく、死人も出ていないだろう。

「……人間、か」

ある言葉を思い出し、呟く。

衣食足りて礼を知る、という人間の諺がある。

着る物と食べる物に不自由しなくなつて、人間は初めて道徳や正義を順守できるようになる、という意味だ。

ノーマンズランドには、『誰もいない大地』と名付けられたよう

に、何も無かった。プラントを用いて物資を得ようとも、そのプラント自身が無くなってしまえばどうなるか、ナイブズは良く知っている。

150年前も、つい数ヶ月前も、何も無い大地で人間がやっていたことは同じだ。

狂奔、狂乱、暴走、暴動、略奪、強奪、逃避、逃走、闘争、争乱、……色々があるが、結論は一つ。

誰もが死の恐怖に怯えるあまり、自らの保身ばかりを考え、普段は上っ面に被せた偽善じみた理性の仮面を取り落とし、人間自身が悪徳と定めているもの。人間の動物としての野蛮で凶暴な本性を曝け出していた。

中には、そうでない者もいたのだろうが、圧倒的多数がそうだった。少なくとも、ナイブズにはそうとしか見えなかった。

その最たる例こそ、ナイブズが人間を間引く為に集めた人間達。

『人間を殺す』ということに一点特化した技能を磨き続けたことによって、『人間』とは言い難い魔の領域に在った、13本の良く切れるタフなナイフ。

彼らを見る度、ナイブズは、人間とはつくづく救いよりの無い屑だと、こんな害獣どもは殺し合わせるか、さっさと駆除するのが一番だと考えていた。

だが、彼らは違った。

ヴァッシュは。ヴァッシュの言葉に動かされた、彼女達は。

ナイブズと同じ150年間、人間と共に在り続けた彼らは。

ナイブズ以上に、人間の愚かさやおぞましさを目の当たりにして来たはずなのに。

人間達に、もっと別なものを見ていた。そして、それを信じていた。

ヴァッシュ達が信じた人間の側面は、ヴァッシュと繋がり、彼女達がナイブズから離れて行く直前の瞬間に、少なからずナイブズにも伝わっていた。

それに、半世紀以上もヴァツシュとは対決していたのだから、彼が何を想い、何を信じていたのかは手に取るように分かった。

それでも、未だにナイブズは、ヴァツシュや彼女達が人間に見出していたものを、信じる以前に完全に理解できていなかった。

ナイブズが信じたのはヴァツシュの言葉で、理解していたのは同胞たるプラント達の心だけだった。

だが。もしかしたら、ここならば。

ノーマンズランドとは全く違う、水という生命の源に溢れたこの星ならば。

乾いた殺伐とした空気ではなく、潤った穏やかな空気が包むこの街ならば。

ヴァツシュが人間達に見出していたものを、俺にも理解できるのではないか？

彼女達が見ていた人間の可能性を、俺も見ることができるとは、ないか？

まだ、ここに来てから人間は2人見ただけ。それだけで、こんなことを決めるのは滑稽かもしれない。

だが、それこそが、ヴァツシュの願いではなかったのか？

殺しても誰も文句を言わないどころか、殺せば大勢から称賛されるようなことをした俺に、手を差し伸べて、共に羽ばたいてくれた、あいつの。

この世でたった二人の兄弟の、たった一つの祈り。

懐から白紙の切符を取り出し、それを見つめる。

これが本当に、あいつや、彼女達からの饒別なら……迷うことは無いはずだ。

決めた。

「……もう一度、向き合おう。人間と」

人間を恐れず、憎まず、見下さず。対等な位置から向き合い、理解しようとする努力する。

今までを白紙に戻そうなどとは思わない。だが、これからは。こ

の切符と同じように、まっさらな所から、また始めよう。

まさか、150年振りに、こうする日が来るとはな。

幼い頃の自分自身を思い出し、自分でも知らぬ内に笑みを浮かべ、ナイブズは踵を返し、街中へと向かった。

気付いてみれば、街は祭りか何かのような、活気に満ちた空気だった。

#3・招く猫

昨日一日中、街の中を歩き回って分かったことは少ない。

この街の名前がネオ・ヴェネツィアであること。

目の前の海の名前がネオ・アドリア海で、そこには様々な地球の国の文化を再現した島が点在していること。

ウンディーネ、シルフ、ノーム、サラマンダーという、地球のヨロツパ圏を起源とする精霊の名を冠した、この街の象徴的な職業があること。

この星には地球と同じ四季が存在し、今は冬だということ。

そして、もうじきカーニヴァル 祭りが始まるということだ。

『お祭り騒ぎ』ならば知っているが、本物の『祭り』を実際に見るのは初めてだ。

レムから教えられたこともあるが、彼女の体験談で、抽象的なことばかり言われてあまりピンと来なかったのを覚えている。ヴァッシュは興味津々だったが。

「……あの猫達も祭りに来たのか？」

ふと、ナイブズは自分と共に汽車から降りた黒猫と白い生物を思い出した。

自分が乗ったのは偶然だが、あの猫達は自ら汽車に乗っていたのだろう。ならば、この時期にこの星にやって来たのは、カーニヴァルに参加するためだったのではないか。

普通ならば、ありえない、下らない、馬鹿馬鹿しい、等と言って一笑に付されるような考えだ。だが、今のナイブズの境遇は普通ではないし、ナイブズにとってこの街も普通ではない。ならば、普通ではありえないようなこともありえるのではないかと思えるのだ。

態々猫までがやって来るような祭りとは、どのようなものだろうか。

そして、その中で人間は、どのような姿を見せるのか。

カーニヴァルの開催は明日からのはず。ならば、もう一日費やして、もつと詳しく調べておくか。

考えを纏めると、眺めていた海に背を向け、再びネオ・ヴェネツィアの市街へと足を向けた。

途中、猫のグループを幾つか見かける。その中には、猫とは掛け離れた姿の生物も混じっていた。

鳴き声まで違う所から考えるに、この星の独自の生物だろうか。だとするならば、良くも違う生き物と共存できているものだ。

そんなことを考えている内に、路地裏を抜けて表通りに出た。街には仮面を被り、中世風の衣装に仮装した人間達の姿が昨日よりも多く見られる。

こうして街を歩いて、人間達の姿を見ているだけでは、カーニヴァルとやらについては何も分からない。さて、何からどう調べるべきか。

「カーニヴァルかあ。こんな素敵なお祭り、誰が考えたんだろー」

「カーニヴァルはイタリア語でCarnevaleと言って、『お肉よサラバ!』という意味なの。元々は、四旬節を迎えるためのお祭りだったのよ」

「しじゅんせつ?」

「キリスト教徒がイエス様の復活までの40日間、お肉やお酒を断つて慎ましく過ごすとして、精進する期間のことよ。その長くて辛い四旬節に入る前に、思う存分、飲んで食べて陽気に騒ごう、っていう習慣からカーニヴァルは生まれたの」

「ほへー」

「もちろん今ではキリスト教徒に限らない、この街独自の仮装のお祭りになっているけどね。それにカーニヴァルは、長かった冬に終わりを告げて、やがて来る春を祝うお祭りでもあるのよ」

思わぬところで解説が聞けた。

たまたま近くを通りがかった家……ではなく、出ている表札から水先案内業の小さな会社らしい。そのこのテラスで話している2人の水先案内人の会話の内容が、偶然にもナイブズが求めていたカーニヴァルの基礎知識だった。

なるほど、そういう祭りだったのか。仮装をしている人間が多いのも、祭りだからではなく、この街のカーニヴァルがそういうものだからなのか。

思いの他早くカーニヴァルの知識が得られた。これ以上はカーニヴァルの何を調べたらいいかも思いつかない。ならば、他のことをするとして、どうするか。

「にゅ!？」

聞き覚えのある、珍妙な鳴き声が聞こえた。

見ると、そこにはあの汽車から一緒に降りた白い生物がいた。

唐草模様の風呂敷包みを背負って、どこかに行く途中だったようだ。

奇遇な再会だが、特に興味は無い。この後は、この街をもっと歩いて回るか。

そう決めると、ナイブズは足元から聞こえる「にゅっ、にゅっ」という鳴き声を無視して、ネオ・ヴェネツィアの探索へと向かった。

「あの男の人、アリア社長のお知り合いでしょうか？」

「さあ、どうかしら」

街には、活気が溢れていた。

祭りの時期だから、というのものもあるのだろうが、それでも大したものだ。

仮装の衣装に身を包んだ者、路上のみならず水上でも露店を開いている者、それを珍しそうに見ている者と、当然のように接して商品を買う者、空中をエアバイクで疾走する者、水上で船を漕ぐ者。様々な人間達がいて、誰もが活気に溢れ、そして期待と楽しみに心を躍らせているようだった。

頭の真上を飛んで行ったエアバイクを見る。

あれは間違いなく、ロストテクノロジー　ノーマンズランドでは廃れてしまった、地球の高度技術だ。安定したこの星ならば、高度技術が失われることなく発達しているのも当然か。

ノーマンズランドでは見られなかった、頭上を人が乗ったバイクが飛び、遠くには浮島という人工物が宙に浮いているという光景。ナイブズからすれば異様だが、この街の人間にとってはそうでもないらしい。

一部、ナイブズのように物珍しそうに見ていたり、写真を撮ったりしている者達は、恐らくは外部　別の星の人間か。

驚いたことに、この星の周辺では星間旅行というものが定着しているらしい。その証拠が、サン・マルコという国際宇宙港だ。

ノーマンズランドでは、表面上はどれだけ安定して豊かに見える街でも、その実は日々を生きるので精一杯だ。ヴァッシュが身を寄せていた隠れ里の者以外で、他の惑星に意識を向けていた者などいなかっただろう。まして星間旅行など、妄想や空想にすらなかっただろう

ナイブズも外の惑星に行こうと思ったことはあったにはあったが、それも人類を根絶やしにして、生まれながらに隷属を強いられた同胞達を解放しよう、という考えからだ。他の星へ旅行をしようなどとは、一度も考えたことも無かった。

そんな俺が、ある意味旅行同然で別の星にいるとは、皮肉というものか。

物思いに耽りながら、歩を進める。

そして、大きな川に出た。こういうものを大運河、というのだる

うか。

こんな大きな川に街を寸断されていては、交通が不便だろうと考えて辺りを見てみると、黒い舟に10人前後の人間が乗って移動しているのが見えた。成る程、どうやらここはあの舟で横断するようだ。

対岸に、調度舟に乗り込んでいる様子が見えたのでその様子を覗う。

やはり、金が必要なのは当然か。高いか安いかわからないが、老若男女を問わず大勢が乗っているからには、高くは無いのだろう。

水先案内人の服を着た3人の少女が、乗客を黒い舟へと誘導している。

歳の頃は、15から17といったところか。そういえば、チャペルとGUNG-HO-GUNS唯一のダブルナンバー ミカエルの眼から派遣されて来たあの2人も、それぐらいの歳だったか。外見の違いは、細胞レベルまで改造されているミカエルの眼と比較すれば当然か。

ふと、気付いた。

何時の間にか、舟の中にあの時の黒猫が紛れている。白い生物に続いてあの黒猫にもまた会うとは、奇遇というよりも奇縁というやつか。

何となく、その舟がこちら側にやって来る様子を眺める。途中で黒猫の存在に他の乗客や舟を漕いでいる水先案内人も気付いたようだが、放り出すようなことはせず、そのまま来るようだ。

舟が棧橋に着くと、黒猫は人間の合間を掻い潜って素早く降りてナイブズへと駆け寄ると、その足元で、ぴたり、と止まった。

「……俺に用か？」

「にゃあ」

どうやら、そのようだ。もしかしたら、先刻の白い生物もナイブズに用があったのかもしれない。

暫し黙考し、ナイブズは黒猫に付いて行くことにした。
その背中を、1人の『オレンジぷらねっと』所属の水先案内人が
見ていた。

「190cmぐらいの長身、ワイシャツに黒いズボン、黒髪に泣き
黒子……全部、合ってる」

「どうしたんだ、杏？」

「え、う、うん。ちよつと、あの男の人が会社で探している人かも
しれなくて」

「へえ。……って、その人、どこにいるんだ？」

「……あれ？」

ネオ・ヴェネツィアには、この時期に起こる不可思議な現象があ
る。

それは、普段は街に多くいる猫達の姿が、カーニヴァルの期間だ
け殆ど見られなくなることだ。特にそれは火星猫に顕著となってい
る。

カーニヴァルの活気に紛れて忘れられがちなこの現象に、ある人
はこんな仮説を立てていた。

この時期には猫達も猫妖精の下で『猫の集会』を開き、共にカー
ニヴァルを楽しんでいるのではないかと。

無論、そんなことはナイブズの知るところではない。

だが、彼は当然のように猫達の姿を今日も見えていた。

そして今も、黒猫に導かれて、路地裏を歩いていた。

途中、ナイブズは周囲の異常に気付いたが、敢えて騒ぐようにな
とはせず、黒猫の後を追って歩き続けた。

周囲が、静か過ぎる。

幾ら人気の無い路地裏とはいえ、祭りの活気に湧いている人間達の喧騒が聞こえて来ないはずがない。

加えて、空間そのものにも違和感を覚えていた。ノーマンズランドとアクアの空気の違いは多大なものだが、それでも、空間に違いがあるなどと感じる程ではなかった。

途中、どこかの角を曲がった時に、まるで目に見えない何かを『通り抜ける』ような感覚がしたが、それは勘違いではなかったようだ。

30分ほど歩き続けて、広い空間に出た。公園のような造成された場所ではなく、人間が街を作り建物を建てて行く中で、自然と出来た空白の場所のようだ。

人間の気配は無い。だが、人間でないものの気配ならそこら中からする。

気配の正体は、猫だ。気配などを感付けない人間でも、一つの場所に大量に集まった猫達の臭いと呼吸音で分かるだろう。

周囲を見回して、自分に向けられているのが敵意ではなく奇異の目の類であると判断すると、ナイブズはこの場所の中心部へと進んだ。黒猫は咎めるでもなく、道を開けて静かにしている。

すると、どこからか音楽が聞こえてきた。

ズンタカ ポコン ポンココ ポコン ズンタカ ポコテン

ズン タカタ

軽妙な音楽を鳴らしながら現れたのは、黒い套に全身を包み、顔を白い仮面で隠した小人の楽団。

そして、それらを率いる、豪華な鬘かづらと仮面で仮装した、マントを着たナニカだった。

その気配には、覚えがあった。

この星に来るよりも前、あの星を発った後に出会った、人外の存

在。

「車掌……では、ないか」

似て非なるこの気配は、恐らく同族なのだろう。

「お前が、俺を呼んだのか？」

問うと、仮面のものは恭しく頷いた。芝居がかった動作に見えるのは、その風体のためか。

あの時の車掌とは違い、動作の意味が直接伝わって来ないことから、ナイブズは目の前のものと車掌が別の存在であることを改めて確認した。

「それで、何の用だ。まさか、呼び寄せるだけが目的というわけではないだろう」

重ねて問うと、仮面のものはどこからか黒い套と、白い仮面を取り出し、それらをナイブズへと差し出した。

それを受け取るよりも先に、ナイブズは仮面のものの後ろに控え、軽快に音を鳴らし続けている小人たちを見た。

あの体格は、明らかに人間ではない。加えて、臭いは上手く誤魔化しているようだが、この場に溶け込んでいる気配で、正体を察せる。

なるほど、この星には本当に猫の国があったのか。

昨日、海を眺めている時に何となく思いついたことが真実だったとは、なんと愉快な。

ということは、目の前にいる仮面のものの正体は……猫の国の王、といったところか。

そして、差し出された套と仮面の意味は、誘いか。

「人間に混じって、祭りをするのか？」

ナイブズは、人間と向き合い、その在り様を理解しようと思った。だから、人外の者だけの集いならば、参加しようという意欲は皆無だった。

すると、仮面のものは大きく頷いた。当然だ、と言わんばかりに。「……そうか。ならば、いいだろう」

頷いて、ナイフズは差し出された衣装を手に取った。

#4・カーニヴァル

猫の国の王から手渡されたマスクと套を身に付けて、ナイブズは王とその従者と思しきもの達と共に、猫の集会所から出発した。

人語を解する人形のような猫曰く、「今の彼は“カサノヴァ”だ」ということだった。

『今日から始まるカーニヴァルは、カサノヴァと共に歩くだけで存分に楽しめます。無論、人間達と共に』

その言葉を取り敢えずの当てとして、ナイブズはカサノヴァの後に付いて歩いていった。

路地裏を歩いている途中、仮面を外してそれを見る。

偶然か、その仮面はナイブズが一時期付けていた仮面と似たデザインだった。

あの仮面を被っていたのは、ジュネオラ・ロック・クライシスからの約2年間　ヴァツシュが失踪していた頃だったか。

あの頃のナイブズは、ヴァツシュに人間を見限らせる為に、人間を使ってヴァツシュに最高の苦しみを与えようとしていた。

何者よりも人間らしく、誰よりも人間を愛しているヴァツシュにとって、人間に命を脅かされること、人間の醜悪さを見せつけられることは、どれ程の苦痛だったのだろうか。

人間を害虫同然に思っていたナイブズには、全く分からなかった。だからこそ、知らなければならぬ。

俺と同じ絶望を味わった弟が、気が遠くなるほど　人間によって幾度となく傷付けられ、踏み躪られ、騙され、裏切られて、その印を全身に刻み込まれて。

それでも、人間を愛せた理由を。

すぐには全部を知れずとも、今日この先から、少しずつでも。

ある路地を曲がると、辺りの空気が一変した。

先日までとは比べ物にならないほど騒がしく、賑やかな人間達の

気配を感じる。

もうそろそろか。

仮面を被り、カサノヴァの後に付いて歩き続ける。

そして表通り出た途端、今まで聞いたことの無いような大きな歓声がナイブズ達に向けられた。

「カサノヴァだ！」

「すっげえ、本物だー！」

「でっけえー！」

「お、今年は大きいのが1人混ざってるな」

「小人の楽団もいるぞー！」

人間達から向けられる歓声に、ナイブズは思わず呆然として、立ち止まってしまった。

今まで、大勢の人間達から歓声で迎えられたことなど、一度も無かった。寧ろ、人間から向けられる感情で馴染みがあるのは怒りや憎しみ、恐怖や畏れの類で、こんなにも明るい感情を向けられたことは無かった。

稀に、畏敬や崇敬の念を向けて来る者もいたが、あれらは好意ではなく狂信。今聞こえてくる歓声と同じに出来るものではなかった。歓声の大半は、ナイブズの前に立つカサノヴァに向けてのものだった。どうやらカサノヴァは、この街の猫達だけでなく、人間達にも知られた存在らしい。

従者たちが楽器を鳴らし始めると、カサノヴァはナイブズに振り返り、付いて来るようにと身振りで促して、悠々と歩き出した。

その後に、ナイブズも続く。

人間達はカサノヴァを見ては親しげに声を掛けたり、物珍しそうに眺めていたり、写真を撮ったり、様々だ。

この様子を見るだけで、カサノヴァがこのカーニヴァルの中で特別な立場であるということが分かる。しかし、厳密にどんな立場な

のかまでは、流石に分からない。

「カサノヴァは18世紀の地球のヴェネツィアに実在した人物なの。時に脱獄者であり、稀代の女つたらしであり、文学者でもあり、冒険家でもあった。とにかく、スキヤンダラスで有名な人物だったんですって。今では、カーニヴァルの時だけ復活する伝説のアイドルね」

「ほへー」

また都合よく解説が聞けたものだ。

後ろから聞こえてきたカサノヴァを解説する声は、昨日、カーニヴァルの解説をしていた人間と同じものだ。

2度も続けて、都合よく解説を聴けるとは。偶然か、ある種の奇縁か。

それにしても、と、ナイブズは目の前を歩くカサノヴァを見る。特別な存在だと思っではいたが、まさかカーニヴァルの主役だったとは。

人間ではないものが、人間の祭りの主役の位置にいる。このことを、この街の人間達は知っているのだろうか。

「ちなみに、カサノヴァ役は毎年一人にしか許されていなくて、演じるのは大変名誉なことなんだけど……それについては、すごい噂があるのよっ」

すると、後ろからまたもカサノヴァについて話す声が聞こえてきた。

凄い噂というものが気になり、歩を休めずに耳だけを澄ます。

「なんでも、あのカサノヴァはこの街のカーニヴァルが始まって以来 何百年も、ずっと同じ人がやってるんだって」

仮面の下で、思わず目を見張った。

一瞬、足を止めてしまったが、誰かに気取られるよりも先に再び前へと動かす。

「ええー、嘘あつ？ 何百年も？」

「中身は不老不死の妖精だって話よ」

次第に周囲の喧騒が大きくなり、少女達の噂話は聞こえなくなつてしまった。

一度、首だけを動かして後ろを見遣る。既に、話していた当人達らしき姿は見当たらない。見つけたからと言って、どうしようというわけでもなかったが。

視線を前へと戻し、そして、目の前を歩くカサノヴァ　猫の国の王を見る。

何百年もの間、人間の傍に寄り添い続けているという、人知を超越した存在。

その中で、猫の国の王は何を見て、何を感じ、何を想っているのだろうか。

少なくとも、こうして人間達の祭りの主役となっているのだから、かつてのナイブズのように人間を憎悪しているということはないだろう。

「……………お前は」

話し掛けようと声をかけて、やめた。

今は猫の国の王のことよりも、このカーニヴァルを、そして人間達を見ることを優先しよう。

別に、この後に何かをしなければならぬわけでも、したいわけでもない。時間はいくらでもあるのだから、何時でも、次に気が向いた時にでも話をすればいいだろう。

ナイブズは歩く速度を上げて、カサノヴァの隣に並んだ。

カサノヴァはナイブズの行動を咎めることもなく、寧ろ気にした風も見せず、堂々とした足取りを乱さない。

カサノヴァの従者たちもナイブズの行動を歓迎しているのか、先程よりも明るく派手に楽器を奏でている。

しかし、それらには目もくれず、ナイブズが見ているのは、この街の人々のみ。

「カサノヴァの隣を歩いている人、誰だろうね？」

「そういえば、去年まではいませんでしたね、あんな人」

「そんなことはどーでもいいー!!」

「晃ちゃん、急に大声を出さないで。周りの人とかアリスちゃんがビククリしちゃってるよ」

「お前の為だろうが！ さっさとお前の歌を貶した大バカ野郎を見つけて出すぞ」

「でも……カーニヴァルの人混みの中で人探しをするなんて、でっかい無理です」

「無理を押し通して、そのまま道理を押し出してしまえ！」

「晃ちゃん、アリスちゃん、あそこのバウータの屋台に行ってみましょう」

「ア〜テ〜ナ〜!!」

「……でっかい不安です。ついでに、ちょっと怖いです」

「今日からは俺一人がいい」

カーニヴァルが始まって1週間。カーニヴァルの日程の半分以上が過ぎた所で、ナイズはカサノヴァ達にそのように告げた。

カサノヴァ達と共に行動するのが不快になったとか、そういうわけではない。もっと違った視点で、カーニヴァルの中の人間達を見てみたいと思ったのだ。

華やかな主役側の視点から見られるものも多かったが、一参加者としてもカーニヴァルに加わらなければ、まだまだ見えないものがある。そう考えたのだ。

カサノヴァは黙って頷くと、従者たちを連れて、今日もカーニヴァルの中心へと踏み出していった。

仮面と套を返そうとしたが、その必要は無いと手振りでも伝えられた。

だが、今日からはカサノヴァの連れとしてではなく、ナイブズ個人としてカーニヴァルに参加するのだから、そのままの格好では引き締まらない。

套は脱いで畳んで適当な長さにしてから腰に巻きつけ、仮面は折角だからそのまま被ることにした。

この1週間はカサノヴァと共に歩き回っていたため、街を歩いている時は常に周りに大勢の人間がいたが、こうして1人で歩けば、人通りがまばらな所にも行き当たるようになった。

1人1人、人間の様子を窺う。

ある者は恋人と共に、ある者は友人と共に、ある者は家族と共に、ある者は1人で、皆がそれぞれカーニヴァルで楽しんでいるようだ。そう、誰もが楽しんでいるのだ。

それ以外の感情を有しているように見える者は、ナイブズは自身を除いて誰一人として見ていなかった。

十人十色という言葉があるように、人間は1人1人がそれぞれに別個の人生を歩み、その中で独自の感性や個性ができていく。

生まれてから1年間、殆ど同じ経験を積んだ双子 俺とヴァッシュでさえも、感じ方には大き過ぎる違いがあった。袂を分かち、別々の人生を半世紀以上経てからでは、尚更だ。

これだけ多くの人間が集まれば、それぞれの違いは、数え切れないくらいあるだろう。

なのに、こんなにも多くの人間が、同じ感情を共有している。それが殺意や敵意ならば珍しくも無いが、喜びや楽しさなのだ。

カーニヴァルという特別な行事の最中とはいえ、ナイブズには驚くべき事実だった。

人通りの少ない場所ならば、表の空気に馴染まないゴロツキを見かけるかとも思っていたが、少なくともここでは見当たらない。

見る人間、誰もが笑顔だった。仮面を被っていても、口元が見えていればそれだけで分かった。

まるで、この中にヴァッシュが混じっているような、そんな錯覚さえも覚えてしまう。いるはずが無いと、分かっているのに。

少しだけ感傷に浸って、再び歩き出す。

やがて少し大きな通りに出ると、街の地図が書かれた看板を見つけた。

この街の地理に明るくないらしい人間達も、地図の前に集まっている。

それだけならばどうということも無かったが、ナイブズはその中に、奇妙なものを2人見つけた。

1人は、狐の面を被った少年の姿をした、人ならぬ気配を漂わせるもの。

もう1人は、困ったような表情で地図を見ている水先案内人の女性だ。

狐の面の少年はともかくとして、何故、この街の地理に詳しいはずの水先案内人が地図を見ているのだろうか。

そんなことを考えて女性に視線を向けていた内に、狐の面の少年の姿は消えていた。

どうやら人間や猫以外にも、この祭りを楽しんでいるものがあるようだ。

「あの……」

すると、水先案内人の女性がナイブズに話しかけてきた。

この街に来てから、人間に話しかけられるのも、人間と話すのも初めてか。

「なんだ？」

仮面を被ったまま、ナイブズは頷いた。

この出会いの意味を、ナイブズも、水先案内人の女性も知らない。
いや。きっと、この出会いにも、どんな出会いにも、出会ったその瞬間に意味は無い。

出会いの意味は、出会ってから作られていくものなのだから。

5 ・ 違う謳声 / 同じ歌

「どこかで、会ったことがありますか？」

「この街の人間に知り合いはいない」

褐色の肌の水先案内人からの問いに、ナイブズは即座に返した。知り合いがないどころか、この星で人間と言葉を交わす事自体が初めてなのだ。よもや、人間の方から話しかけてくるとは思わなかった。

「そうですか……」

水先案内人の女性は少し首を傾げたが、ナイブズからの返事に頷いた。

それを見て、ナイブズは女性から視線を外した。既に地図の内容は暗記した。取り敢えずの目的地へと向かおうとして、また、先程の女性に話しかけられた。

「あの、もう一つ、いいでしょうか？」

「なんだ」

「晃ちゃんとアリスちゃん……あ、私の友達と後輩なんですけど、2人とはぐれてしまったんです。どこかで見ませんでしたか？」

「さつきも言ったが、この街の人間に知り合いはいない。仮に見ていたとしても、分かるはずが無いだろう」

「ああ、そうでしたね。失礼しました」

再び、この星に知己のいないナイブズに分かるはずの無い質問をされ、簡明に答えた。

女性は、今度は大して落胆もせず、寧ろ自分のミスに気付いてかやや慌てているようだ。

踵を返そうとした所で、女性のある行動が気になり、ナイブズは足を止めて女性の様子を覗いた。

「おい。どうして地図を見ている」

彼女は、この星で初めて言葉を交わした相手。それ故か、普段な

らば無視するところを、ナイブズは自分から声を掛けていた。

「晃ちゃんとアリスちゃんがどこにいるか、探しているんです」

女性は、極めて真剣な顔でそのように答えた。

答えの内容に、ナイブズは暫し呆然とし、やがて、女性が何をしていたかを理解した。

「……地図にそんなことが書いてあるはずが無いだろう」

「……………ああっ」

ナイブズからの指摘に、女性は自身の行いが無意味だったことに気付いたらしく、はっ、としたように声を出した。

大丈夫か、この女。

うつかりしている、間が抜けているにしても限度があるだろう。

そんなことを考えて、ナイブズは、彼女が水先案内人の服を着ていることを思い出した。

そこであることを思い付き、ナイブズはそのまま女性へと声を掛けた。

「特徴は？」

「はい？」

「お前が探している2人の特徴を教える」

ナイブズが言うと、少しの間を挟んでから女性は聞き返した。

「一緒に探してくれるんですか？」

頷いて、ナイブズは更に言葉を続けた。

「その代わり、それが終わったらお前は俺にこの街を案内しろ」

仮にも水先案内人ならば、この街の地理や歴史、そしてカーニヴァルにも詳しいはず。

そうすれば、これから人間を知るのもより容易くなるはず。

そのように考えて、ナイブズは女性に対してそのように申し出た。女性は、微笑みながら頷いた。

「いいですよ。こう見えても私、ウンディーネ水先案内人ですから」

「その服装を見れば分かる」

またもナイブズが即座に返すと、女性は自分の服を見て、そして

頭の上の帽子を触った。

「そうでした。制服でした」

本当に大丈夫か、この女。

そのようなことを思いながら、ナイブズは女性から連れの2人の特徴を教えられた。

アキラは長い黒髪で、声が大きい。

アリスは緑色の長髪で、声が小さい。

最大の特徴はその2人も水先案内人の制服を着ていること。

しかし、水先案内人の制服を着てカーニヴァルに興じている者達の姿はチラホラと見える。すぐに見つけるのは難しいだろう。

歩きながら、ナイブズは女性の連れの2人を探しつつ、人間達の様子も見っていた。

やはり、見る人間の殆どが楽しそうだ。そうは見えない者は、恐らく遊び疲れているからだろう。

だが、相変わらず。

楽しんでいる、ということは推測出来ても。

何が楽しいのか、分からない。

「あの……」

「なんだ」

女性に声を掛けられ、視線は向けずに声だけで聞き返す。

「貴方は、どうしてこの街に来たんですか？」

その言葉に、ナイブズは足を止め、女性の顔を覗き込む。

女性は、とても不思議そうな顔をしていた。

今、この街で仮面を被って練り歩いている者がこの街にいる理由は、普通であれば一つだ。この女性は抜けているところがあるとはいえ、水先案内人。それが分からないはずが無いだろう。

なのに、こんなことを訊いて来たということは、ナイブズの感情をこの僅かの間に取り取ったということか。

驚きつつも、ナイブズは思考を巡らす。

この事を、他者に教える義理は無い。自分だけの真実として、胸

に仕舞っておくという選択もある。

だが、問い掛けてきた相手はこの星で初めて出会い、言葉を交わし、奇しくも共に行動している人間。

ならば、大まかに教えても、いいかもしれない。

「……切符を、弟達から餞別に貰った。それで、気が向いたからこの星で降りた。それだけだ」

懐に、大切に仕舞っている白紙の切符に手を当てながら答える。

「やっぱり、カーニヴァルを観に来たわけではないんですね」

すると、女性は納得したように頷いた。

それに、ナイブズも頷き返す。

「ああ。事のついで、だな」

辺りを見回しながら、答える。

それにしても、と、ナイブズは女性に視線を戻す。

やはり、女性はナイブズの感情の機微を読み取っていた。そのことを認めて、ナイブズは女性の評価を改めた。

「それじゃあ、私がカーニヴァルを案内しますから、一緒に楽しみましょう」

すると、女性はナイブズにそのようなことを提案して来た。

「お前の連れを探さないのか」

女性の提案に、ナイブズはそう聞き返した。

それは確かに先んじて提案はしていたが、彼女の探している2人を見つけてからのはずだ。

「晃ちゃんとアリスちゃんなら、きっと大丈夫ですから」

言って、女性は微笑んだ。

大丈夫か心配されているのはお前ではないか、と思いつつも、ナイブズはその提案を受け入れることにした。

「そうか。なら……頼む」

「はい。では、まずは近くの大運河に行きましょう」

ナイブズからの返事を聞くと、女性は歩き出した。

その姿は、先程までのどこかボケた様子からは想像もできないほ

ど凜としていた。

伊達に、水先案内人ではないということか。

そうして、ナイブズは女性に案内されながら、改めて、カーニヴァルを見て回った。

驚いたことに、全てが違って見えた。

漠然と、ただ見て歩いていているのと、そこがどういう場所で、今何をやっているのか、隣で解説されながら見るのとは、まるで別の風景を見ているようだった。

ナイブズは女性の観光案内に耳を傾け、カーニヴァルの様子に目を凝らしながら、ネオ・ヴェネツィアの街を見て回った。

1人でいた時よりも彩鮮やかに見えるのは、気のせいではあるまい。

ノーマンズランドとは違い1つだけの小さな太陽が沈み始め、街並みが夕焼けに染まり始めた頃。

マルコ・ポーロ国際宇宙港の前に来た所で、水先案内人の2人組を見つけた。

「いたぞ」

「え？」

「あの2人だろう」

言っ指し示すが、常人の視力では判別が付かないか。

先に立って歩き、付いて来るように促す。

やがて、距離が100mを切ったぐらいのところ、黒髪の女性の方がナイブズの方に顔を向け、その後ろの女性の姿を認識して、顔色を変えた。

「アテナ！」

「アテナ先輩」

黒髪の女性が叫ぶと、少しの間を挟んで緑色の髪の少女もそれに

続いた。

「晃ちゃん、アリスちゃん」

女性も2人の名を呼び、彼女達に駆け寄った。

「まったく、心配させやがって」

「会えて良かったです。アテナ先輩だけじゃ、会社の寮に帰れるかも心配でしたから」

「ごめんね、心配かけちゃって」

3人が再会を喜び合っているのを見届けて、ナイブズは踵を返した。

既に見返りは貰っている。なら、約束を果たした時点で別れるのが当然だ。

「あ、待って下さい」

呼び止められ、ナイブズは足を止めた。

もう、彼女と自分を繋ぐものは何もない。無視してしまっても良かったはずだが、何故か出来なかった。

「今日は、ありがとうございます」

背を向けたままのナイブズに、彼女　アテナは感謝の言葉を送って来た。

仮面の下で目を瞑り、回想する。

人間に、感謝の言葉を送られたのは、これが初めてでは……無かったか。

俺に初めて感謝の言葉を送ったあの男は、俺が気まぐれで助け、そして気まぐれで名を与えたら、泣きじゃくって喜び、感謝の言葉を口にしていた。

あの時は、鬱陶しくて汚らしいと、嫌悪の感情しか湧かなかった。だが、今は。

不思議と、心地よく感じる。

ヴァッシュよ、ほんの少しだが、俺は変わったようだ。あの頃のように、お前が願っていたように。

これまでの150年に比べれば足取りは遅すぎるかもしれないが、

俺は、お前や同僚達が見ていた方向に進めているか？

「おい、返事ぐらいしたらどうだ」

感慨に耽っていたところに、後ろから苛立ちを含んだ声が聞こえてきた。確か、アキラという女だったか。

肩越しにアキラを一瞥してから、アテナと目を合わせる。

「世話になった」

一言だけ、礼の言葉を言って、再び歩き出した。

「明日も、ご案内しましょうか？」

不意に告げられた意外な言葉に、再び、足が止まる。

ヴァツシユやレムのような、とまでは言わない。だが、どうやら、あの女も随分とお人好らしい。

「……………ああ」

小さく頷いて、ナイブズは人混みの中へと進んで行った。

その仮面の下の表情は、誰にも、ナイブズ自身にも見えなかった。

カーニヴァルの最後の2日間を、ナイブズはアテナに案内されながら見て回った。

待ち合わせ場所の指定をしていなかったが、最初に出会った場所に行ったらアテナはまた地図の看板を見ていた。

その姿に再び呆れたが、案内を始めれば、彼女はすぐにその姿が嘘のように凜々しい表情へと切り替わる。

伊達に観光案内のプロではないということか、とナイブズも感心

する。

途中でカサノヴァ達と鉢合わせる機会があり、その折に、ナイブズはアテナからのカサノヴァについての噂を改めて聞いた。

いつの頃からか、まことしやかに流れている噂。

毎年変わらぬ姿を見せるカサノヴァの正体は、不老不死の妖精である。

どうやらその噂は地元民の間では知らぬ者が殆どいないほど有名な話らしい。実際に、正体を確かめられた者はいないらしいが。

そんな話をしていると、カサノヴァがナイブズ達の方へと顔を向けた。

見つめること暫し、カサノヴァは何かを言うでもなく、従者たちを連れて再び歩き出した。

ナイブズの目には、何かに納得して、或いは何かを確認してから立ち去ったように見えたが、真偽のほどは定かではない。

ただ、見送るその姿が、それを取り巻く人々の様子が、先日までとは違って見えた。

そして、カーニバル最終日の夜。

人の気配の無い水路の脇で、ナイブズはアテナと共に歩いていた。やがて、道が途切れて、海に出た。

夜空の闇色と溶け合い、一体となっている海を眺めながら、ナイブズは口を開いた。

「お前のお陰で、有意義に過ごせた。礼を言う」

背を向けたまま、すぐ後ろにいるアテナへ、ぎこちないながらも礼を言う。

「これくらい、お安いご用ですよ」

アテナはナイブズの高圧的とも取れる言葉を聞いても、柔和な態度を崩さず、微笑みを浮かべて小さく頷いた。

ズンタカ ズンタカ ポコポン

すると、後ろから聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。

ナイブズとアテナは振り返り、そちらの方向を見る。

カサノヴァの一行が、近くの路地を通っていた。1人、水先案内人の少女が加わっていたが、何かの気紛れだろうか。それとも、ナイブズと同様にカサノヴァが自ら招き入れたのか。

その様子を見届けて、最後尾の少女が見えなくなっただけから、ナイブズは音楽からあることを連想し、なんとなく呟いた。

「水先案内人は、歌も唄うらしいな」

このネオ・ヴェネツィアを象徴する水先案内人の仕事内容は3つに大別できる。

舟の操舵、観光案内、そして舟謳。

実際に自分で見聞きして得た知識ではないので、確認がてら、水先案内人の本人に聞いてみただけだった。

だが、どうしたことか。アテナはナイブズの言葉を聞いた途端、小さく震えて俯いた。

「……はい」

声も小さく消え入りそうなもので、明らかに普通ではなかった。

「どうした」

「え？」

「急に暗い顔をしたのはどうしてだ」

声を掛けたことに自分自身でも驚きながら、ナイブズはアテナの返事を待った。

やがて、アテナは少しずつ、事情を話し始めた。

「私、歌うのが大好きで、ちょっとは自信もあつたんです。会社のみんなや、お客様も、私の歌を聴いて喜んでくれました」

そう言うアテナの顔は、とても楽しそうだった。自己陶醉の類ではなく、その自分の歌に纏わる楽しい思い出によるものだろう。

だが、その表情はすぐに、再び翳った。

「けど、少し前に……会社への帰り道に歌っていたら、水路の脇に立っていた人に……嫌いから黙れ……とても冷たい顔で、言わ

れたんです」

それを聞いて、ナイブズは波の音を聴いている時に、近くを通った水先案内人にそう言ったのを思い出した。

だが、今はそのことを口に出す時ではないと考え、何も言わず、アテナの話が終わるのを待つ。

「それが……凄く、苦しくて……歌え、ないんです」

震えながら、アテナはそこで言葉を切った。

それが、ただの人間による罵倒だったならば、アテナがここまで傷つき、落ち込むようなことは無かっただろう。

だが、それを言った時、ナイブズの肉体は以前までの習慣から、彼が以前、人間に相対した時に使っていた表情と声色になっていたのだ。

人間を害虫同然に思い、悪意を以って見下していた絶対零度の眼光と、嫌悪だけが込められた声。

かつて、想像を絶するほどの憎悪を内包していたそれらを向けられて、そのような感情に耐性や馴染みが全く無いアテナは、その残滓だけでここまで苦しんでしまっているのだ。

そのことを理解し、自分のしたことを承知の上で、ナイブズは考えた。自分はどうすべきか、どうしたいか。

そして、思い出したのは、昔日の言葉。

少しくらいの違いは、なんとかなるよ。沢山話して、理解し合う。僕達のところと、ヒトのところに、差なんてないんだから。そうだろう？

「それは、俺だ」

言いながら、ナイブズはカーニヴァルの間、アテナと出会ってからずっと被っていた仮面を取った。

ナイブズの素顔を見た瞬間、アテナの表情が凍った。やはり、勘違いではなかったか。

一度、アテナから視線を外し、ナイブズは視線を海へと向けた。

「俺は、この星に来て、初めて海を見た」

「そう、なんですか？」

不安が6割、驚きが4割という具合の声で、アテナは聞き返して来た。

ナイブズは頷き、言葉を続ける。

「波の音を聴くのも初めてで……俺は、夢中だった。だから、それ以外の音は邪魔だった。だからあの時、お前の歌をまともに聴かずに、ああ言った」

そこで一度言葉を切り、アテナの様子を覗う。

その顔には怒りは見えず、代わりに見えるのは戸惑いだった。ナイブズがあのように言った理由がこのようなことだったとは、思っていないかったのだろう。

歌が雑音にしか聞こえないほど、波の音に聞き入るということは、どうやらこの星では珍しいことのようにだ。

しかしナイブズにとって、波の音は未だに新鮮で、いくら聞いても飽きないと思えるものなのだ。

暫く待つが、アテナは考えあぐねているらしく、何かを言おうとする気配は無い。

ならば、このまま立ち去ってしまおうかとは、思わなかった。

「……頼みがある」

ナイブズが声を掛けると、アテナもナイブズの方を見た。

目を合わせたまま、言葉を伝える。

「唄ってくれないか？」

傲慢、無神経、厚かましい等々と思われ、相手の反感を買ってしまいかもしれないことを、ナイブズは平然と言った。

しかしその表情は、以前のような無表情や、無表情を装った憎悪を隠す仮面ではなく、真摯なものだった。

言われたアテナは余程意外だったのか、暫く呆然としていた。

やがて、アテナは数度深呼吸をして、何かを決めたような仕草を

見せてから、口を開いた。

「……………舟謳カントォーネではなくて、私が好きな歌でもいいですか？」

「ああ」

ナイブズが頷くと、アテナは一拍の間を置いて、唄い始めた。

その歌を聴いてすぐ、ナイブズは目を見張った。

曲調はアテナによってアレンジされているようだが、この歌を、ナイブズが聞き間違えるはずがない。

だが、敢えて何も言わず、ナイブズは目を閉じ、耳を澄ました。

波の音は、殆ど耳に入らなかった。

耳に、心に響いてくるのは、謳声だけ。

その歌を初めて聞いたのは、子守唄としてだった。

まだ赤ん坊だった頃、ナイブズとヴァツシュが眠る時に、彼らの親代わりだったレム・セイブレムはいつもその歌を唄ってくれた。

ヴァツシュは、その歌が大好きだった。

ナイブズも、その歌は嫌いではなかった。

そして、今聞こえている歌と、その謳声も。

不思議と、心がほぐれて、安らいでいく。

「……………いい、歌だな」

歌が終わって、ナイブズは少しの間を置いてからそう言った。

すると、それを聞いたアテナは先程までの暗い表情が嘘のように、嬉しそうに微笑んだ。

「お婆ちゃんから教わった、大好きな歌なんです」

「そうか」

まさか150年振りに、あの歌を聴くことになるとは、思ってもみなかった。

アテナとレムの謳声は全く別物で、曲調も違っていた。

時も場所も人も、全てが違う。

だが、紛れもなく同じ歌だ。

しかし、と、ナイブズは回想する。

最後にレムの歌を聴いたのは、テスラのことを知った時の就寝時間前だった。

あの時、俺の心は荒れ狂っていた。その後、久し振りに唄ってくれたレムの歌が少しも響かないほど。

だが、今聞いたアテナの歌は、歌が終わった今でも、心に響いている。

同じものでも、こうも感じ方が変わるものなのか。

俺の心は、こんなにも変わっていたのか。

「ありがとう」

気が付けば、自然とそんな言葉が口から出ていた。

誰にも言うことは無いと思っていた、感謝の言葉が。

「はい。私こそ、ありがとうございます」

アテナからも感謝の言葉が返って来る。

感謝したのは自分なのに、それをまた感謝で返されるとはどういうことかと思っただが、なんとなく、そういうものなのだろうと思うことにした。

ヴァッシュとも長らく、お前が間違っている、考え直せと言いつて来た。それと、本質的には似たようなものだろう。

「俺は、ナイブズだ」

「私はアテナ・グロリーイです」

別れ際、ナイブズはこの星で初めて誰かに自分の名を伝え、誰かの名を聴いた。

ほんの少しだが、前に進めた気がした。

ヴァッシュがどれだけ傷ついても諦めなかった　かつて、自分

自身も望んでいた道を。

「少しぐらいの違いは、なんとかなるよ。沢山話して、理解し合う。」

僕達の「にじろと」ボートの「にじろ」に、差なんてないんだから。そつだ
るつ？。「ヴァッシュ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1992t/>

夢現（ゆめうつ）

2011年8月11日03時37分発行